

55. Free T<sub>3</sub> 測定 of 臨床的意義について

笠木 寛治 高坂 唯子 新井 圭輔  
 中島 鉄夫 御前 隆 遠藤 啓吾  
 小西 淳二 鳥塚 莞爾 (京大・放核)

Amerlex free T<sub>3</sub> RIA kit による free T<sub>3</sub> 測定について基礎的検討を行うとともに、臨床的意義を評価した。

インキュベーションは 37°C, 2 時間でよく、短時間で測定が可能であった。測定値の変動係数は同一アッセイ内で 3.1~7.5%, 異なるアッセイ間で 3.1~4.6% と良好であった。

健常者の血清 free T<sub>3</sub> 濃度は 3.9±0.7 (mean±SD) pg/ml であり、甲状腺機能亢進症では全例高値、低下症では低値を示した。前者では健常者群との重なり合いが見られなかったが、後者では 35 例中 3 例が正常域を示した。euthyroid Graves 病, TBG 減少症ではほぼ正常域に分布した。妊婦では妊娠月数の増加に伴い、低値となる傾向が認められた。

潜在性甲状腺機能低下症, あるいは軽度の甲状腺機能低下症の症例では正常値を示すものが多く, free T<sub>3</sub> 濃度は total T<sub>3</sub> 濃度と同様, 機能低下症の診断には有用とはいえなかった。しかし, 甲状腺機能亢進症の診断にはすぐれており, 特に治療後の follow up において total T<sub>3</sub> 濃度よりも有用な指標となることが認められた。

56. 褐色細胞腫における <sup>131</sup>I-MIBG シンチグラフィ

塩見 一樹 藤田 透 阪原 晴海  
 中島 鉄夫 太田 仁八 小西 淳二  
 鳥塚 莞爾 (京大・放核)  
 中尾 一和 松倉 茂 井村 裕夫  
 (同・二内)

交感神経遮断剤の誘導体を <sup>131</sup>I で標識した <sup>131</sup>I-MIBG によるシンチグラフィが褐色細胞腫の診断に有用であると報告されている。われわれは、臨床的検査によって褐色細胞腫の確診がされている 4 症例に対して <sup>131</sup>I-MIBG シンチグラフィを実施した。

前もってルゴールを内服させ、甲状腺ブロックを施した患者に <sup>131</sup>I-MIBG 0.5 mCi を静注し、24 時間後および 48 時間後に全身シンチグラフィおよび腹部局所シンチグラフィを撮像した。

対象となった腫瘍の大きさは、直径約 1.5 cm から直径 10 cm 以上に分布し、このうち直径約 3 cm 以上の腫瘍はきわめて明瞭に描出された。直径 1.5 cm の腫瘍については、腹側からの撮像ではやや不明瞭であるが、背側からの局所シンチグラフィでは集積が認められた。

正常臓器で集積の認められたものは、唾液腺、肝臓、脾臓、膀胱であった。心臓については集積の認められたものと認められなかった症例があった。

なお、シップル症候群の患者において、頸部の甲状腺髄様癌の再発腫瘍への強い集積が認められた。

これらの検討から、<sup>131</sup>I-MIBG シンチグラフィの褐色細胞腫診断上の有用さは明らかに認められると思われる。その診断可能な腫瘍の大きさは大体 1.5 cm 程度であると思われる。